

映画に
宛てた
ラブ
レター

2014・8月号

天見谷行人

パークランド ケネディ暗殺、真実の4日間

パークランド ケネディ暗殺、真実の4日間

2014年7月7日鑑賞

歴史が変わる日に遭遇した人々

世界の歴史が変わった、四日間がある。1963年11月22日、ケネディ暗殺、そして狙撃犯とされるオズワルドの射殺である。超大国アメリカ合衆国の大統領が狙撃され、そしてその犯人までもが射殺されてしまう。一体、この世界を揺るがす大事件はなぜ起きたのか？ 犯人の動機は？ その背景にあるのは何か？ 未だにこの事件は謎が多すぎる。そして真相は深い闇の中にある。本作は、この事件が起きた日から四日間だけに的を絞った映画である。その日、大統領一行は専用機でダラスに到着。朝からテレビは、大統領の遊説のニュースで持ち切りだ。一般の市民達も、若き、はつらつとした合衆国のニューリーダーに熱狂。ファーストレディーであるジャッキーの人気もあって、大統領夫妻はアメリカ国民のアイドル的存在だ。街中が沸き返るような興奮の中、田舎町、ダラスのパークランド病院では、当直の医師（ザック・エフロン）が眠そうな眼をこすりながら起きてくる。

仮眠ではなかなか体の疲れはとれない。医者も大変な職業である。

さて、今日も、ルーティンワークの患者達を看るとするか.....。

一方、大統領のパレードが行われる沿道では、みんないい場所で観ようと朝から場所取りである。そんな中、8ミリカメラが趣味の男性、エイブラハム・ザブルダー（ポール・ジアマッティ）がいた。



この8ミリでバッチリ、ケネディ大統領夫妻を写すんだ。彼はわくわくしている。さあ、パレードが始まった。ザブルーダーはカメラを回し始めた。来る来る！！ 目の前に、大統領を乗せたオープンカーが迫ってくる。ザブルーダーは、8ミリカメラを興奮しながら回し続ける。

しかし、その直後

「Oh！！ マイガー！！」

彼は世界の歴史が変わる、まさにその一瞬をカメラに収めてしまったのだ……。

冒頭から、緊迫感溢れる描写が続く。

作品全編にわたって、ドキュメンタリータッチを貫き通した事は大正解だと思う。大統領が狙撃された後、搬送されるパークランド病院。慌ただしく行われる救命救急措置。医師、看護師の白衣もシークレットサービスの白いシャツも、大統領の血で真っ赤に染まっている。そして手術室の片隅でおびえ、震える大統領婦人ジャッキー。彼女の手は血まみれだ。大事そうに両手で何かを包み込んでいる。それは吹き飛ばされた夫、ケネディ大統領の頭の一部なのだ。

この事件で多くの人の人生が、変わってしまった。大統領婦人のジャッキーはもちろん、歴史的瞬間をカメラに収めてしまったザブルーダー。犯人とされるオズワルドの兄と母親。シークレットサービスたち。そしてアメリカ合衆国は若く希望に満ちた大統領を失ってしまった。



本作では、よく取りざたされる、数々の陰謀説、そういったものにはあえて一切語られていない。ただ、事件が起きた四日間を、まるで観客自身がレポーターになったかのような、客観的な眼で事実を捉えようとする。

そこには、いままで一般人が知り得なかった、事件当日から四日間のリアルな真実が提示される。それはあくまでも事件を構成する材料なのだ。観客はその材料から何を感じるか？

この事件を巡る謎はいつの日か解明されると信じたい。

なお、ケネディ暗殺をさらに突っ込んだ視点で描いた作品には、ケヴィン・コスナー主演の「JFK」がある。こちらをあわせて鑑賞したい。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 ピーター・ランデズマン

主演 ジェームズ・バッジ・デール、ザック・エフロン

製作 2013年 アメリカ

上映時間 93分

予告編映像はこちら

https://www.youtube.com/watch?v=fgL3_Zhxg5Q

her 世界でひとつの彼女

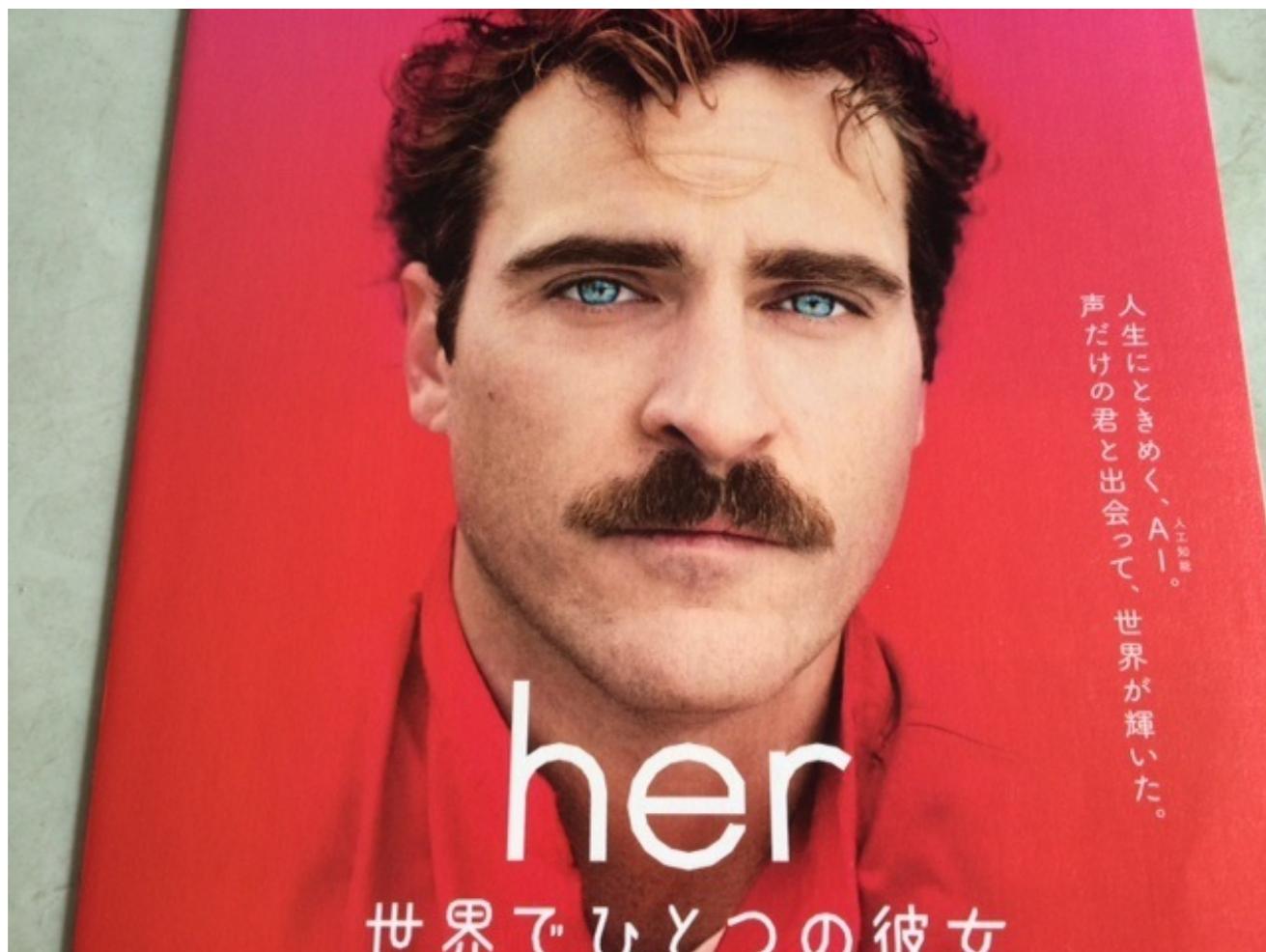
her 世界でひとつの彼女

2014年7月12日鑑賞

瞳が見つめたOS・彼女

ホアキン・フェニックスって、こんな表情ができる俳優なんだねえ。

どう見たって、純真そのもの。透き通った瞳。



子供の心のまま、大人になってしまった人。

彼がかつて出演した「ザ・マスター」

あれは恐ろしい作品だった。兵役を終え、心の傷が癒えない主人公。彼は復員後、一般社会になじめず、新興宗教にのめり込んでしまう。教団教祖に心酔し、ロボットのように動く人物を演じている。また「エヴァの告白」では、貧困にあえぐ、アメリカ移民の女性たちを誘い「夜の女」に仕立て上げる人物を、これも怪しい雰囲気演技で演じた。

「アブナイ」「怪しい」「いかがわしい」という人物を演じさせたら、いまやホアキン・フェニックスの独壇場のようだ。

そんな彼が、全く新しい人物像を演じるのだ。

俗にいう「草食系男子」をである。

これは観てみたい、と思った。劇場に足を運んだのは、ただそれだけの理由である。

ストーリーは「アカデミー脚本賞」を受賞している、との触れ込みだったが、予想に反し、実にありきたりで、誰でも思いつくだろうと言う程度のものである。



主人公、セオドアは手紙代筆の専門企業に勤めている。ラブレターの代筆なんて朝飯前だ。彼はゴースト・ライティングのスペシャリストなのだ。

その彼が新しいコンピューターソフトを購入する。

ソフトは人格を与えられている。彼はソフトの設定を女性にした。

ソフトの名前は「サマンサ」

コンピューターソフトとは思えない程「彼女・サマンサ」は、セオドアの気持ちを理解し、辛辣なジョークさえ飛ばしてみせる。彼は愉快ではしょうがない。あまり人付き合いがうまくないセオドアは、リアルな人付き合いよりも、どんどん「サマンサ」にはまり込んでしまう。「彼女」がない生活なんて考えられない。やがて彼は「サマンサ」と疑似恋愛に陥ってゆく。

う〜ん、これで「アカデミー賞」ですかあ〜。と言う感じだなあ。

今や、自律型ロボット兵器が実在し、ロボット兵器が自分の判断で、人間を殺せる時代である。ならば、ロボットが人間を愛したり、嫉妬したり、浮気したり、挙げ句の果てに、ご主人様を見限ることさえ不可能ではない、とたやすく想像出来る。

私事で恐縮だが、1995年、僕はAppleのMacを初めて購入した。信じられなかった。マウスひとつで、スイスイなんでもやってのける。

始まったばかりのインターネットにもつないだ。

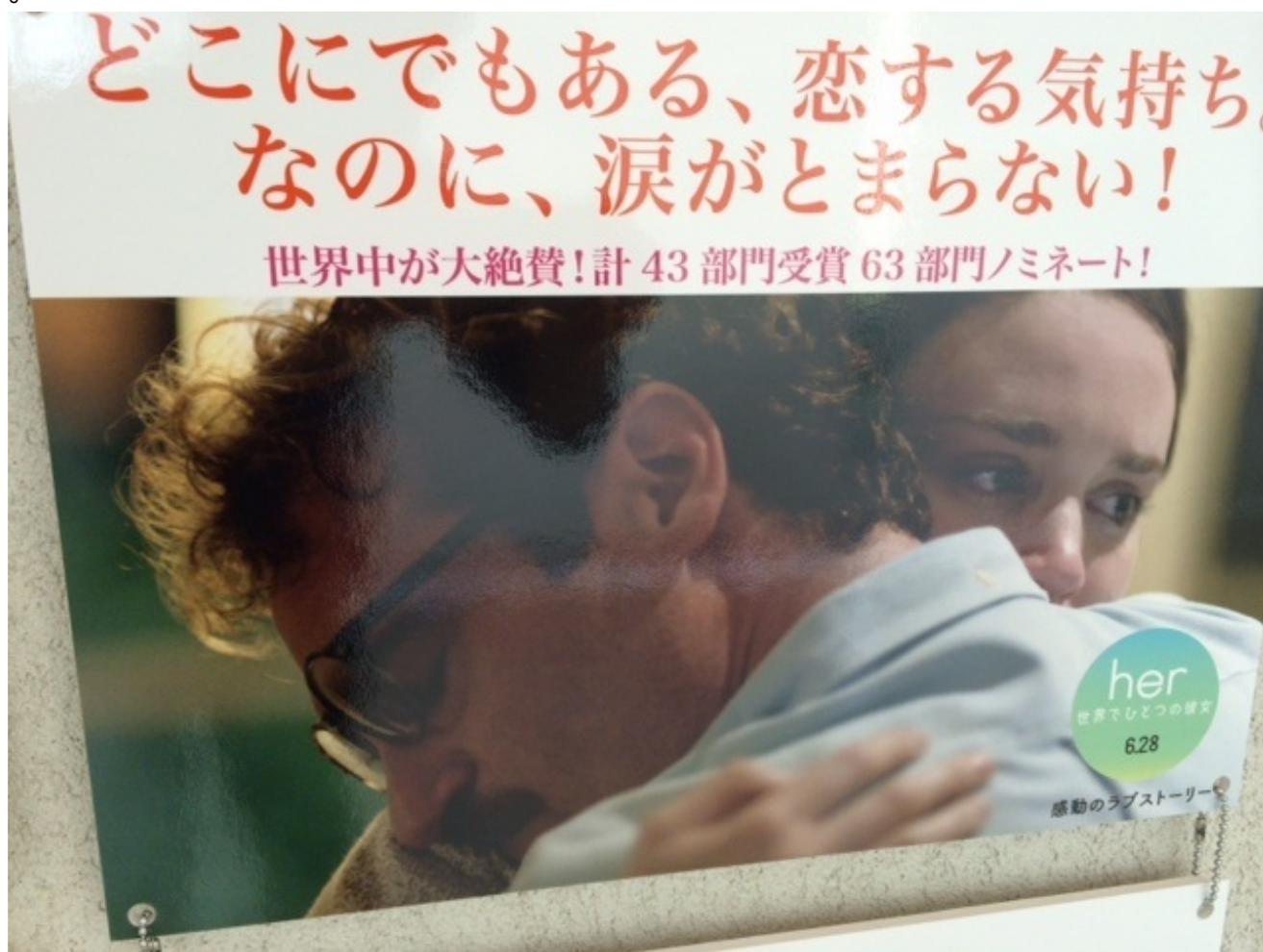
ホワイトハウスのサーバーから、当時の大統領夫人、ヒラリーさんの画像が太平洋を渡って僕のMacに送られてきた。

そればかりか、スイスの原子核研究所CERNの画像が表示されたりした。MacでドリカムのCDを聞きながら文章を書き、お絵描きをし、FAXを会社に送り、世界中と繋がる。もう、完全にMac中毒。

その後も僕は、仕事でも頭の中は「七色りんご」に染まっていた。まさにそれはMacというパーソナル・コンピュータに「恋してしまった」状態だった。僕とMacの関係は2014年の今、四代目のMacに引き継がれている。

そんな僕だから、本作での主人公の心情はとても理解出来た。

なお、本作を鑑賞して思わぬ収穫だったのは、相手役のエイミー・アダムス。いいねえ〜、彼女



クリント・イーストウッドと共演した「人生の特等席」でも、映画界の巨匠相手に、全然ひるむ事なく、自分の演技をぶつけて行った、肝の据わり方は大したものだ。

しかも彼女には、ハリウッド女優にありがちな「私はハリウッドのセレブなのよ」「大物女優なのよ」という「臭み」が全然ないのである。本作で彼女の自然体の演技が観られたのは、せめてもの救いといえるだろう。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 スパイク・ジョーンズ

主演 ホアキン・フェニックス、エイミー・アダムス

製作 2013年 アメリカ

上映時間 126分

予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=xmkFRwmOzVA>

ジゴロ・イン・ニューヨーク

2014年7月23日鑑賞

のびのび演じる「俳優」ウディ・アレン

ウディ・アレンが監督もせず、脚本も書かず、純粹に俳優として出演する?! 一体どんな心境で出演をOKしたのか? そこに興味があって本作を鑑賞した。

映画の作りは、ウディ・アレンへの敬意が感じられる、洗練されたタッチ。絵の作り込みはキレイだし、音楽もオシャレ。センスがよく、気が利いているのだ。ワンカットの長さも適切だと思うし、若手監督にありがちな自己満足、演出過剰といったショットは、ひとつとしてない。監督、脚本、俳優、三役をこなしたジョン・タトゥー口の力量は素晴らしいものがある。



マレー（ウディ・アレン）は祖父の代から続く、古ぼけた本屋の主人である。だけど、経営難で店をたたむ事に。ふとしたきっかけから、マレーは、友人の花屋で、配管工事もやってのける、フィオラベンテ（ジョン・タトゥー口）を、ホストに仕立て上げる事を思いつく。マレーの提案に、渋い顔のフィオラベンテ。

「俺はイケメンじゃないぜ」

マレーはなんとか彼を説き伏せようとする。

「ミック・ジャガーがイケメンか?! 大口開けて怒鳴ってるだけだ! 君は女を喜ばせる術をよ〜く、知ってるだろ?」

半ば押し切る形で、マレーは「ジゴロ」いわゆる「ポン引き」を開業。

始めてみると「ビジネス」はなかなか好調。だが、あるご婦人が客になったとき、彼らはトラブルに巻き込まれる。

婦人が属するコミュニティはユダヤ教徒。聖職者「ラビ」がユダヤ教徒としての生き方を厳格に指導していたのだった……。



この作品を理解するためには、ちょっとばかり予備知識を入れておいた方がいいと思う。

自身がユダヤ系である、ウディ・アレンの出自と、ユダヤ教徒としての守るべきモラル、それに生活習慣などだ。

本作を観る限りでは、まるで「元老院」とでもいうような「聖職者・ラビ」の存在と、その影響力が丁寧に描かれている。

本作がちょっとセクシーなコメディ映画、だけでは語れない部分はそこなのだ。

ウディ・アレンは、最近色々とスキャンダラスな話題にさらされているけれど、紛れもなくアメリカ映画界の巨匠の一人。

監督、脚本といった、映画を作る人、フィルムメーカーとして、確固たる地位を築いている。そのウディ・アレンが、なぜ今「ひとりの俳優」として出演をOKしたのか？

それは巨匠の単なる気まぐれだろうか？

いや、そんな事はないのである。

監督 ジョン・タトゥーロ

主演 ジョン・タトゥーロ、ウディ・アレン

製作 2013年 アメリカ

上映時間 90分

予告編映像はこちら

https://www.youtube.com/watch?v=jP_-sSgSsWs

GODZILLA

GODZILLA

2014年7月25日鑑賞

子供だまし映画はゴメンだぜ！

「アメリカ人って、やっぱりヒーロー大好きなんだよね」と思ってしまいます。日本生まれの怪獣「ゴジラ」ですが、アメリカ人にとっての「GODZILLA」のイメージは？

本作では、そのゴジラをヒーローに祭り上げております。

アメリカ人が思い描くヒーローの条件とは？ 悪いヤツをやっつける。人間を助ける。正義は勝つのだ～！！ とまあ、至って単純明快。

本作での「GODZILLA」は善玉ヒーローで、まるで「水戸黄門」様のような扱いです。そこで登場するのが悪役の怪獣。

悪いヤツはとにかく悪い。

「分かりやすく悪い」

そこんところが大切です。それがアメリカ流です。この悪者怪獣、放射能を食べて暮らしています。だから「原発」なんて美味しい”ごちそう”のようなものです。

そこで原発を襲っては、美味しい放射能をチューチュー吸って生き延びています。

実は、ぶっちゃけていうと、本作ではゴジラさんより、この悪玉怪獣の出番の方が多いのです。

もう、こっちの方が優秀な悪役キャラで大暴れ。やりたい放題！

で、見ている観客からは、この映画、いつになったら「我らがゴジラさん」が登場するのか？

と首を長くして待つ訳です。しかし、じれったいほど出てきませんね。



さて、日本版オリジナルの「ゴジラ」はその誕生の背景に「原爆」「戦争」の恐ろしさ。そして「神の火」と言われた原子力を「コントロールできています」と、あっけらかんと、のたまうようなエライ人達に対して、冷や水をぶっかけるような、強烈な意思と動機がありました。

ゴジラと言う生命体は本来、人間の想像を遥かに超えた存在です。

もちろん、人類にも危害を加えるし、放射能をまきちらす。

こんな摩訶不思議な生命体、見た事ない。

つまり「ゴジラ」と言う存在そのものが、あらゆる意味で「想定外」「ソーテーガイ」そのものなんですね。

「原子力は絶対安全。幾重にも、幾重にも安全に安全を重ねるように施設は作られています」毎日テレビでCMを流し「安全神話」と言う言葉が作られました。しかし、その「安全神話」は正に「砂のお城」でした。

あの3：11以降「想像を遥かに超える」とか「想定外の」と言う言葉が、うんざり、聞き飽きるほど使われました。なぜそれほど「ソーテーガイ」と言う言葉を使いたがるのか？

「想定外だからシ・カ・タ・ガ・ナ・イ」

「ソーテーガイ、だから俺の責任じゃない」と言いたい人が多くいるのでしょう。

3：11での出来事は、日本と日本人よりも、海外の人々へ、より多くのショックを与えたようです。つまり

「想定外は”必ず起こりえる””ということなんです。

本作「GODZILLA」でおきる惨劇は、残念ながら、観客が想像出来る「想定内」に”こじんまり”と収まっているように感じます。



アメリカの映画製作者達が、オリジナル版「ゴジラ」に対して、大変な畏敬の念を持っているのは、大変よく伝わってくるのです。日本の映画ファンとして「ゴジラ」を大切に思ってくれる事はうれしい事です。であるならば、やはりオリジナル版「ゴジラ」が持つ「神秘性」「人智を超えた生命体」「何をしでかすか分からない」存在として描いてほしかった気がします。

なぜ、ゴジラは正義の味方でなくてはならないんだろう？

ゴジラと言う存在そのものが「人間たちの浅はかな正義」であり、都合の良い「アメリカの正義」を象徴するものにすり替えたいのか？ とさえ思えて来るのです。

今頃、海の底のオフィスで

「俺様はアメリカンヒーローだからな」とソファとオットマンに足を投げ出し、サングラスに葉巻をくゆらせ、次回作のオファーを待っている「Mr・GODZILLA」氏の姿が目につかぶようです。おっとそこへ、ハリウッドのエージェントから電話です。

「なに、次回作？ この前みたいな”子供だまし”映画はゴメンだぜ！」

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 ギャレス・エドワーズ

主演 アーロン・テイラー＝ジョンソン、渡辺謙

製作 2014年 アメリカ

上映時間 124分

予告編映像はこちら

https://www.youtube.com/watch?v=a_WRsHyOTjY

2つ目の窓

2つ目の窓

2014年7月31日鑑賞

身体と海と光と

演技する、演技していること。それが恥ずかしく思えてくる。

そう思えるほど、本作では、役者が演じる事を丁寧に排除しているようにさえ思える。

主演の若いふたり。よくこんな素材を見つけてきたものだ。

極端に少ないセリフ。

奄美の風景、音楽、暮らし、そして奄美の海に溶け込むようなふたり。

河瀬監督の演出のこだわりだろうか？

映画は動く人物や風景などをカメラが写し取ってゆくもの。

その「写し取る」と言う事に監督の全神経が集約されている。

「写し取る」という「行為」そのものが監督の「意思表示」なのだ、と改めて思わせてくれる。

だから、観客は、監督の「絵」に感じていれば、それでいい。

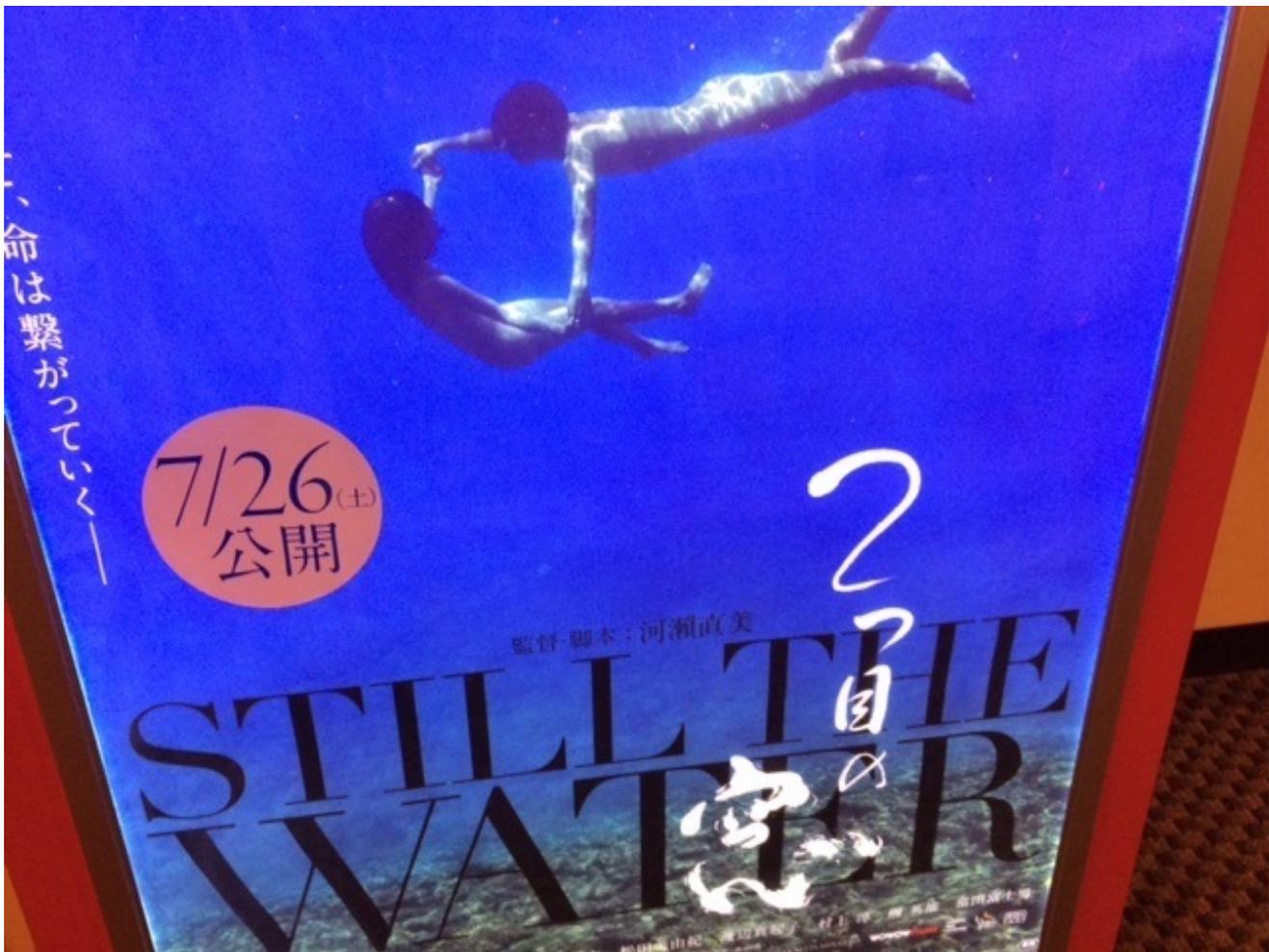
こういう作品の場合、特にストーリーは重要ではない。

奄美の高校生、界人は、母親と二人暮らし。別れた父は、東京で入れ墨の仕事をしている。

幼なじみの同級生、杏子。彼女はまるで野生児のようだ。

学校帰り、制服のまま海で泳ぐのがすきだ。

自分が海に抱かれるように感じる瞬間。彼女はイルカがたわむれるように海の中に身を預ける。



彼女は母は病の床にある。医師からは余命宣告を受けている。

近所のおじいさんとの何気ない会話。

「人間はね、死ぬんだよ。みんな、いつかは死ぬんだよ」

それこそ、お迎えが近いとも思える老人が、杏子に教え諭すようにつぶやく。

その言葉は若さの絶頂期にあると言える、杏子にとってどのようにひびくのか？

さて、界人はある夜、海で男性の死体を見つける。死体には入れ墨があった。

彼はその背中に見覚えがあったのだ。独り身で寂しい母親が、かつて付き合っていた男だったのだ。

界人は、次々に男を引っ張り込む母親を許せないでいる。

大人になるってどういう事だろう？

男と女が結ばれるってどういう事だろう？

SEXすることで、男と女は何が分かり合えるのだろうか？

思春期の男女の感性をとおして、性への目覚め。生と死への意識。

海と一体になる界人と杏子の姿があまりにも美しい。

「2つ目の窓」を開ける事によって、淀んだ感情や思考が、流れとなって吸い込まれてゆく。そこに演技など、もういらぬ。

ただ、二人の肢体と海と光が作る映像の美しさを堪能したい。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 河瀬直美

主演 村上虹郎、吉永淳、杉本哲太、松田美由紀

製作 2014年 日本、フランス、スペイン

上映時間 120分

予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=HpOjbvDa6bA>